



TITLE:

「転回」の思想－ハイデガーの思索の道に通底する中心的なモチーフについて－(Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

貫井, 隆

---

CITATION:

貫井, 隆. 「転回」の思想－ハイデガーの思索の道に通底する中心的なモチーフについて－. 京都大学, 2018, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k21179>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2019-03-14に公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	貫井 隆
論文題目	「転回」の思想 —ハイデガーの思索の道に通底する中心的なモチーフについて—		
(論文内容の要旨)			
<p>現代哲学の代表的思想家の一人、M. ハイデガーに関する研究は全世界的に行われており、この間に蓄積されてきた研究成果には質量共に真に瞠目すべきものがある。ところがそれでもなお、専門家の間で未だに議論の決着が見られない幾つかの難題が残存している。その最たるものは（実に半世紀以上もの長きに亘った）ハイデガーの思想的営為の全容に関する統一的な解釈である。周知の通り『存在と時間』前半部の刊行後（殊に一九三〇年代中盤以降）、ハイデガーの論述の様式は劇的な変貌を遂げた。従来のハイデガー研究では、この変転は、ハイデガー自身の表現の援用を以てして「転回（Kehre）」と呼び慣わされ、彼の思想の発展史上、著しき画期をなす節目として把握されてきた。そしてこれに伴って斯界では、その思索の全行程もまた「転回以前／以後」というような具合に両断され、『存在と時間』において元来企図されていた研究計画の成就に向けて邁進する「前期ハイデガー」と、当該計画の挫折が転機となって、それ迄とは全く別の新機軸を打ち出すに至った「中・後期ハイデガー」は基本的には相異なるものとして、それぞれ別箇に取り扱われるのが今なお常であると断じて過言ではない。</p> <p>しかしながら他方でハイデガー自身は、彼の思索の主題が絶えず同じ一つの事柄であり続けていることを説いて已まなかった。換言すれば、研究者達の所謂「転回」の前後を問わず、自らが思想家として根本的には何一つ変節していない旨を彼は繰り返し主張したのである。かくて今日斯界の大勢を占めている如上のハイデガー解釈は、未解決にして重要な問題を抱えることになる。すなわちそれは、当該解釈の指針（前期ハイデガーと中・後期ハイデガーとの峻別）とハイデガー当人による＜立場の首尾一貫性＞の標榜との整合性や如何という難題に他ならない。</p> <p>先行研究を巡る以上の如き状況を踏まえ、本論文は主として次の三点を闡明し、以て今述べた問題の解決に寄与せんとするものである—(甲)ハイデガーの思索の道において終始一貫して論じ続けられている中心的なモチーフは存在するのか否か、(乙)仮に存在する場合、その同一不変のモチーフとは何か、(丙)このようなモチーフの一貫性にも拘らず、『存在と時間』以後にハイデガーの論述様式の転換期が存在するのは何故か。</p> <p>如上の目的を果たすべく、本論文の議論は以下の如く進められる。第一章では、ハイデガー自身による「転回」の語の用法の精査を通して、その本義が次の二つに大別される。それは、1. ＜「基礎存在論」から「メタ存在論」への転換＞と、2. ＜存在者と存在との交互関係＞の二義である。そしてその上で、先述の解釈の指針に反して、彼の所謂「転回」とは何れの語義に照らしても『存在と時間』の当初の構想の撤回とそれによる（従来とは全く別様の仕方における）新規蒔き直しの謂ではないことが示される。</p>			

しかしそれならば『存在と時間』前半部の刊行後、ハイデガーは何故に論述方法を転換せざるをえなかったのか。第二章において申請者はこの転換をく論述に用いられる語彙の変更>として捉え直し、かかる変更が行われた背景として『存在と時間』前後の時期に使用されていた語彙が伝統的な形而上学の「超越論的問題設定」を多かれ少なかれ前提しており、その為には当時のハイデガーの思索が暗々裡に「主観主義」に偏していたことを指摘する。つまり申請者の見るところでは、ハイデガーの論述方法の転換は『存在と時間』の当初の計画の放棄であるどころか、却って寧ろこの主観主義の克服を通して、所期の計画を一層徹底的に遂行する為にこそ行われたのである（丙の問いへの答え）。

ではその計画とは如何なるものか。第三章の論証によれば、それはく時間性を存在了解の地平として剔抉し（基礎存在論の課題）、その上で今度はこの時間性なる地平の方から全ての存在者の有り様、及び存在理解の歴史的変遷を解明すること（メタ存在論の課題）>である。そして申請者は、中期以降のハイデガーによる「存在の歴史」の構想もまたこうした「メタ存在論の課題」の達成と見做されうる所以を詳らかにしつつ、ハイデガーの思索には、これを終始貫道するモチーフが存在しているという独自の見解を呈示する（甲の問いへの答え）。そしてかく旗幟鮮明にされた立場から乙の問いに答えるべく、後続の四つの章では当該のモチーフが実際に種々例示されることになる。

第四章では『存在と時間』の「頹落」概念と、それ以後の「存在の歴史」の思索における「作為機構(Machenschaft)」や「総かり立て体制(Ge-stell)」の概念との連続性が、また第五章においては、前期ハイデガーの所謂く実存の本来性／非本来性>と後期ハイデガーが説くく性起(Ereignis)に対する準備／無為無策>に等しく通底している「選択の選択」という契機が、その内実に関して立ち入って審察される。

続いて第六章では、前章において論究された「実存の本来性（死への先駆的決意性）」と「性起に対する準備」との共通性が、先程とは別の観点から改めて議論の俎上に上せられる。その観点とは、死や性起といったく我々から最も遠く離れた所にある最終目的（テロス）>とそれ以外の（つまりこの最終目的よりも手前の中間段階に位置する）諸目的との関係である。こうした問題設定の下で、ヌースとプロネーシスの両立可能性を主張する前期ハイデガーのアリストテレス解釈を援用しつつ、上述の中間段階の諸目的（現在の具体的な諸状況）が件の最終目的（将来の終末）と結合し、この最終目的の方から規定される可能性、言い換えれば、現在の状況を生きる我々の生が、将来の終末を正視すること（ヌース）で過去による因果的繫縛を脱し、身の回りの人や物に対する思慮深い関わり（プロネーシス）を達成する可能性を説くことが本章の議論の骨子をなす。

そして第七章（最終章）では、ハイデガーが終生思索を凝らした事柄の最たるものとして「言葉」が取り上げられる。申請者の分析によれば、言葉に秘められた二つの働き―すなわち世界を構成する働き（前期には「世界の有意義性」、後期には「世界性起」とハイデガーが呼んだもの）と、現在中心的な時間観に基づく一面的な存在理解から存在者を保護する働き（前期ハイデガーの所謂「形式的告示」、後期ハイデガーの所謂「詩作」）―に我々の注意を促すことこそが、ハイデガーの言語論の終始一貫した狙いに他ならないのである。

(論文審査の結果の要旨)

全集各巻の陸続たる上木に伴い、新資料が相次いで日の目を見ることによって、M. ハイデガーの思想の研究は日進月歩の活況を呈している。殊に禁秘の書として長きに亘り門外不出であったものの、漸く二〇一四年より公刊が開始された一連の随想録(通称『黒冊子(Schwarze Hefte)』)の登場は、今や斯学の新局面を拓きつつあると断じては決して過言ではあるまい。しかしながら他方で、哲学史研究全般の大勢と(一次・二次の別を問わず)最新の研究文献の著しき増加が相俟って専門分化の一端を辿っている昨今のハイデガー研究では、一斑を見て全豹をトすることすら最早許されぬ程迄に専門主義が横行していることが仇となって、関連資料が未だ出揃わぬ昔日に喧伝された旧来の<ハイデガー思想の全体像>が批判的検討を加えられぬ儘温存されていることもまた否めない。そしてその結果、この旧態依然たる概観が個々の細分化された研究を陰に日向に嚮導する軌範であり続けている為に、多くの重要文献の新出にも拘らず、遺憾ながら斯学は根本的には十年一日の如く停滞している憾みを禁じえないのである。

本論文は、汗牛充棟たる新資料の博搜渉獵とその縦横無尽なる活用を以てして、ハイデガーの思索の道程の全容を先行研究よりも更に一層正確に描き直すことにより、ハイデガー研究における上述の如き閉塞を打破するパラダイム転換の招来に寄与せんとする進取果敢なる研究である。それ故、本論文における申請者の根本的な企図は以下の如きものとなる。すなわちそれはハイデガーの思想展開の千変万化の流れの中に、彼が終生抱懷し、不斷に問い続けた思索のモチーフを看取することである。

このような狙いに鑑みつつ、全七章から構成された本論文は刮目に価する創見に富んでいる。以下、各章において特筆大書に値すると思われる点を順次挙げていくことにしたい。

第一章において申請者は、『存在と時間』前半部の刊行後、一九二〇年代の終わりを境にハイデガーの思想は「前期」から「中・後期」の立場へと大きく「転回」と見る巷説を退けるべく、この「転回」の語に込められたハイデガー自身の真意の審察に努めている。それにより申請者は、<基礎存在論からメタ存在論への移行>という第一の意味における「転回」は『存在と時間』の続稿の杜絶を俟って初めて語られる訳ではなくして、寧ろ同書の思想圏(つまり「前期」の立場)において既にして関説されていることを鋭く指摘している。

第二章ではハイデガーによる形而上学批判が議論の俎上に上せられている。但し一口に「ハイデガーの形而上学批判」と言っても、<旧来の形而上学に対する批判>と<この伝統的な形而上学の旧弊に陥るまいとしてハイデガー自身が新たに唱道した形而上学に対する後年の自己批判>は相似て非なるものであり、両者は慎重に区別せられるべきであるという申請者の見解は至当である。

第三章は、前期ハイデガーによる「テンポラリテート」論の綿密な読解に当てられている。従来、ハイデガーのこの所論は頓挫し、彼の前期思想の行き詰まりを示すものとして否定的に評価されるのが常であるが、申請者はそれが立論上、破綻を来してはならず、しかも実質的には中・後期ハイデガーの「時間-空間」論に引き継がれていると解しうる所以を周到に説いている。定説に対して正面から異を唱える新解釈の提起の可能性とその然るべき論拠の呈示は蓋し申請者ならではなしえぬ卓見である。

申請者のハイデガー解釈の独自性は、第四章においても顕著である。ここでは前期ハイデガーの所謂「頽落」の内実が分析され、そこで剔抉される「頽落」の構造が後年のハイデガーの思想に登場する「作為機構」や「総かり立て体制」のそれと同型で

あること、従ってその限りに於いてハイデガーの思索には終始、繰り返し問われ続けている事柄が存在していることが明暢な筆致で論じられている。

続く第五章でも、前期ハイデガー哲学における「本来性」概念、及び後期ハイデガーの所謂「性起への準備」といった（時代も文脈も相異にする）様々なる変奏から、ハイデガーの終生に亘る思索の主題が浮き彫りにされる。それは「決断」のモチーフであり、しかもその核心をなすものが「決断そのものについての決断」に他ならぬことが説得的な仕方で闡明されている。

第六章は本論文の中でも白眉と称せられるべき論攷である。ここで申請者は、ハイデガーが「再臨」、「死」、「性起」等の名の下で問題にし続けた事態に面した我々の有り様を時間様相の観点から巧みに描き出すことに成功している。すなわち申請者によれば、そのような我々の在り方においては「通常の計算からすれば無駄であるにもかかわらず、それでもなお為そうとするという[...]それ以上の原因を持たない自己原因的な決定によって、過去から未来へという通常の因果的な流れは逆転し、それまでの過去は、その突発的な将来を基準に再解釈されることが可能となる」。この洞察は啻にハイデガーの思想の精髓を捉えているのみならず、将来世代に関する責任を始めとする世代間倫理学の諸問題を考える上でも裨益するところ大であると思われる。

第七章においてはハイデガーの言語論が取り上げられている。注目すべきは、申請者がこれを時間の問題との連関において考察することで、実り豊かな成果を挙げていることである。このような考察は他に余り類を見ないものであり、本論文の類稀なる独自性を窺わせて余りあるものである。

但し他方では、ハイデガーの思想的発展の中に潜む不変のモチーフの剔抉に意を注ぐ余り、本論文がこの主題に基づく個々別々なる変奏の諸相を時代毎に丹念に跡付けていく作業を些か疎かにしがちであることは否めない。更には、申請者が区別した「転回」の二義はいかなる相互関係の中にあるのか、申請者が指摘するハイデガーの思索のモチーフは何れも「存在の問い」が主題として設定される『存在と時間』以後のそれである以上、これらのモチーフは同書以前であり、存在論を未だ標榜していない初期ハイデガーの立場においても果たしてよく認められうるものであるのか否かといった本論文の議論にとっては極めて重要な意味を有する筈である問題も、遺憾ながら未決の儘残されている憾みを禁じえない。しかしながら上来述べ来たった如く、余人の追隨を許さぬ本論文の功績は真に多とすべきものであり、高く評価せられうる。

よって、本論文を博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成三十年一月二十六日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。なお、本論文は、京都大学学位規程第十四条第二項に該当するものと判断し、公表に際しては当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降